

荒井保男著『医の名言』

鶴見て内科を開業している荒井保男先生がこのたび中央公論社から『医の名言』を出版した。著者は約十年前から最近に至るまで八十編の『医の言葉』を「新薬と治療」誌上に連載し、私もそのほとんどに目を通して来た。今回その中の五十二編（日本中国二十九、外国二十三）を選び、年代順に並び変え、加筆、訂正、削除して一書となしたもので、大変読みやすくなっている。

彼は臨床医家であると同時に大変な努力家である。博覧強記、その上多読、名文家である。医学の歴史は大分前から研究し、造詣が深いのは言うまでもない。文学博士の肩書きにふさわしく、単に医学史だけにとどまらず、一般文化人、哲学者、科学者、化学者、文筆家等に対しても研究の分野を広めている。すなわち兼好法師、岸田吟香、橋本左内、中江兆民、正岡子規、細井和喜蔵、トーマス・モア、ラヴオアジエ等が記されているが、普通これらの人は医師の対象には入らず除外されてしまうが、著者は上手にアレンジしている。兼好法師では「命長ければ恥多し」は彼の本心でなく、老人は安心立命の境地に達するのが本命であるとする。末期ガンの患者で余命一年半と知った中江兆民は「一の一年半は疾也、他の一年半は日記なり」の言葉を残した。法律家で著述家のトーマス・モアは自殺を否定、安楽死を肯定している。

さて本題に返って、本書の題名が『医の名言』であるように、各章の初めに登場人物の名言が記されている。引き続きその説明だけなら、普通の書き方であろうが、著者は読者の理解を深めるため、生年、死亡年のほか、当時の医学界の状況と登場人物のアウトラインを述べている。

中国と日本の古代医学史を知りたければ、『史記』扁鵲倉公伝、『傷寒論』『医心方』の三章を熟読されたい。「巫を信じて医を信ぜざるは、治せざるなり」と述べた脈診、鍼灸の大家扁鵲の全貌が如実に描き出されている。「傷寒論」は張仲景の著作とされるが、『黄帝内经』とともに中国医学を代表する二大古典である。著者が深い感動を覚えた本論の序文を皆さんも賞味して頂きたい。『医心方』は丹波康頼の著述でいうまでも無く我が国最古の医書で三十巻からなる。中国文献の失われた部分を大量に残存している点に価値がある。文頭書に掲げられた医の名言は『医心方』第一巻からの言葉で『千金方』からとった言葉といわれる。著者は結語として「一読して私にはフイエランドの『医戒』を思い出さずにはいられない。そこには洋の東西を問わず共通した医師への戒律がある。ただ異なるのは、その底に流れる思想であって、西洋では「愛」であり、東洋では「慈悲」であると結んでいる。

臨床観察と経験を重んじ、自然治癒力を信じた「医聖」ヒポクラテスの言葉は「吾人は経験を貴ぶ」であった。哲学者であり、解剖学者でもあったアリストテレスの言葉は「自然は無駄なものや余計なものを作らない」であった。

鎌倉時代の医療では、忍性、榮西、性全の三人を挙げなければならぬ。残念な事に本書では忍性の名はでてはいないが記載がなく、したがって彼の名言も見られない。「茶は養生の仙薬なり。延齡の妙術なり。」と唱えた榮西は宋から茶を輸入し、源実朝の二日酔いに茶を勧めると同時に『喫茶養生記』を呈呈し茶を我が国に定着させたことで有名である。「慈心ノ心ヲ以テ……」の梶原性全は仮名書きの『頓医抄』と漢文の『万安方』を著しここに描かれた内景図は我が国最初のものとなる。

レオナルド・ダ・ヴィンチ、アンブローズ・パレ、ウイリアム・ハーヴェー等の描写も手慣れたものである。

「日本医学中興の祖」と称せられた曲直瀬道三は若くして田代三喜に巡りあい、のち京都へでて啓迪院を作り弟子を教育した。李朱学の長所を取り、「慈仁」を我が言葉とした。毛利元就、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康らの武将からも尊敬されたという。道三の啓迪集は甲斐の永田徳本にも継承され、徳本は患者の貧富には関係なく一服十八文の薬で医療をしたと伝えられる。彼の「医弁」には「万病利ツカエテ……」の名句がある。

江戸時代鎖国下の日本へ危険をおかし蘭官医として来日した外国人の数は少なくないが、その代表とされるのはケンペル、ツェンペリー、シーボルトの三人である。この三人は時代も少しづつ異なり、来日の目的も違っていたが、日本に西洋の文化をもたらし、日本を世界に紹介した点ではいずれ劣

らない。ケンペルは元禄の平和日本で、將軍綱吉から「長寿の秘薬はないか」と聞かれ、ツェンペリーは梅毒の水銀療法を初めて日本人に教え、シーボルトは植物学、動物学その他もろもろの研究をしたことが本書にも述べられているが、この三人の比較研究も大変興味深い。

字数に制限があるため、本書の最後部に見られる人物(貝原益軒、賀川玄悦、「医は意なり」良沢、玄白、関寛斎、ナイチンゲール、ヴィルヒョウ、パスツール等)のコメントは割愛した。本書を座右に備え、直接玩味される事を希望して攷筆する。

(大滝 紀雄)

〔中央公論社・東京都中央区京橋二一八―七、電話〇三―三三五
六三―一四三一、一九九五年十月発行、A5判、二六〇頁、定
価一、八〇〇円〕

西山茂夫監修

『皮膚科の病名由来ア・ラ・カルト』I、II

平成六年八月某日、長門谷洋治先生より『皮膚科の病名由来ア・ラ・カルト』をいただき(正式にはIは入っていないが、ここでは便宜上捜入した)、続いて七年十一月八日に続編たるIIをいただいた。

両編とも西山茂夫名誉教授(北里大学)の監修の下に、○今泉孝、○小野公義、○蔵方宏昌、小泉雄一郎、○長門谷洋治、前田学、藤岡彰の諸先生の執筆(右肩の○印は本学会々員を示